

イトニ屬スベキナリ。

輝石ニハ單斜、斜方ノ兩種アリ、後者ハ前者ヨリ多量ナリ、普通輝石モ紫蘇輝石モ淡綠色ナレドモ、後者ハ多色性著シキヲ以テ直チニ區別シ得ベシ、兩者共結晶形判然セザレドモ紫蘇輝石ハ重ニ細長キ柱狀ヲナセリ、又兩者ノ平行共生ヲ見ル、而シテ輝石中ニハ磁鐵鑛及斜長石ヲ包裹セルモノアリ。

磁鐵鑛モ量少ナク形少ナリ、石基中ニ點々散在スルノ外ハ輝石ノ周圍ニ附着セルノミ。

上記ハ紫蘇輝石、富士岩 (Two-pyroxene Andesite) ニ屬スベキモノナルモ、此外ニ完晶質玄武岩質 (Microclitic) ノ小片ヲ捕取セルモノアリ。

第四章 噴火ノ沿革

本道ノ歴史ハ景行天皇以前ニ關シテハ毫モ記録ノ存スルナシ、而モ其歴史タルヤ唯本道南部二三ノ記事其大半ヲ占メ、本道全般ニ亘リテ記述セルモノハ頗ル近時ノコトナリ、火山噴火ノ如キモ古來屢々出現セシナランモ、其材料甚ダ乏シク、僅カニ左ニ記スル所アルノミ。

一 元文四乙未年七月十二日地震、同十四日ヨリ二十六日迄

山鳴リタルマイ嶽燒ク、而シテ下蝦夷地(俗ニ東蝦夷ヲ下蝦夷ト云フ)タルマイ近所二三日ノ内晝夜暗ク燒灰降ル(松前年々記)

二 聞ク文化中山頂(樽前山頂)發炎、近傍數十里内、砂石紛飛、死傷無算、距今四十餘年、噴煙仍未已(北游乘 菅野白華一名ハ潔北遊シ八月十七日タルマイヲ過グル時ノ記事)

(文化中砂石紛飛シタルコトアリシヤモ知ルベカラザレトモ死傷無算ノ如キ大噴火アリタルカ、當時東蝦夷地ハ幕府ノ直轄ニシテ記録モ少ナカラザルニ絶テ此記事ヲ載セザルハ以テ其記事ノ疑ハシキモノナリト北海道廳殖民公報編纂員河野常吉氏ノ語ル所ナリ)

三 膽振國勇拂郡樽前村字別々ノ住民最上喜平今年六十五歳ノ談ヲ聞クニ、彼レハ明治二年秋田縣ヨリ渡道シ日高ニ住スルコト二箇年ニシテ明治四年現住所ニ移リ、當時近山ヲ徘徊シ獵鹿ヲ業トセシガ、同年舊十二月二十五日樽前岳大噴火ヲ初メ三日ニ夜火山砂礫南ニ向テ降下シ字別々(ベツベツ)ニテハ八寸程積リタリト云フ、從來樽前岳中央部ハ傾斜緩ナル饅頭狀小丘ニシテ今日ノ火口壁ノ最高所ヨリモ約十米モ高クシテ、西方ニ噴氣孔數箇存シ、絶ズ噴孔ニ硫黃ヲ昇華シ、東方ニハ噴氣孔ハナキモ、硫黃礦ハ多量ニ存在シ、函館山田文右衛門ナルモノ其ノ硫黃ヲ採掘シ牛背ヲ以テ山頂ヨリ樽前村ニ運ビ居リタリシガ、當日ノ大噴火ノ爲

メ小丘ハ大部分拋出セラレ深サ約百米ノ凹地ト變ジ、嘗テ外輪山ト中央小丘トノ中間ニ一個ノ溜ヲ存セシガ爆裂ノ爲メ外輪山南部ノ一壁缺潰シ湖水ハ之ヨリ流出シ全ク涸水セリト而シテ數年後噴火口ニ入りテ硫黃ヲ探礦シタルコトアリシガ火口底ニハ當時東西ニ長ク四乃至五米ノ一湖アリテ宛モ瓢箪形ヲナセリ、明治三十五六年頃マデ其湖水ハ存在セシモノ、如シト云フ。

四 明治七年二月八日噴火

明治七年三月十七日(開拓使日誌寫)

●樽前嶽噴火ニ付實際検査ノ儀御届

當使管下膽振國勇拂郡樽前嶽噴火炸烈致候段本月八日上申仕置候處札幌本廳ヨリ官員派遣實際検査ノ上別記ノ通り申來候條此段更ニ御届申上候也

別記

二月九日天晴レ寒薄シ午前六時札幌ヲ發シ行程四里ニシテ「ワツチ」ニ至リ南方ニ中リ俄然黑煙起リ頭上ヲ掩フ天色朦朧硫黃ノ氣鼻ヲ穿ツ少焉アリテ雲烟飛散シテ又晴光ヲ見ル左右密林ニシテ何レノ方位ナルヲ辨ズル能ハズ地上ノ積雪降灰ノ爲ニ色ヲ變ズ午後一時島松驛ニ至リ一旅人ノ今曉昔小牧驛ヲ發シ來ルモノニ遇ヒ問テ其實ヲ聞クヲ得レドモ詳ナル能ハズ一里餘「イサリ」ニ至ル初テ樽前山ヲ西南ニ見ル頂上白烟ヲ噴キ風ニ從テ搖曳シ三里半餘千歲驛ニ投シ在勤官員ニ面會シテ之ヲ問フニ人馬ノ傷害之レナキ由驛ノ近傍沙灰堆ヲ爲ス厚サ三四分ナリ第八時鳴動一聲地震フ門外ニ出テ之レヲ見ルニ樽前山ノ方ニ中リ黑煙沸騰電光激發スル數次ニシテ止ミ黑煙風ニ從テ北ニ散ジ昨日ヨリ數々鳴動シ人民狼狽傷害アラシク恐ル在勤官員ト共ニ之ヲ懇諭シ各其堵ニ安ンゼシム

十日午前第六時發程天晴風軟寒ヲ覺エズ路傍ノ堆沙深サ五六分四里ニシテ

「トキサラマフ」ニ出ヅ野ニ牧スル所ノ馬背灰ヲ被リ班毛ニ似タリ此邊ノ川流盡ク濁水ト爲レ共人家無キヲ以テ幸ニ飲料ヲ欲クノ憂ナシ二里三十四町昔小牧驛ニ至リ在勤官員ニ面會シ其景況ヲ問ヘバ曰ク八日午前第十一時二十五分雷鳴一聲天色忽チ昏黑其時ナラザルヲ怪ミ戸出ヅ之ヲ見レバ樽前山ノ絶頂噴火猛烈黑煙直上天ヲ際シ煙中ヨリ電光激射名狀ス可ラズ人皆恐怖周章ス土人ハ團欒シ「ガムイ」方言鬼神ヲ祈念ス須臾ニシテ灰沙礫降ルコト雨ノ如シ午後二時三十分黑煙風ニ從ヒ南洋ニ散ス三時十分又發シ四時十五分ニ至テ止ム六時再ビ鳴動甚シク家屋皆震フ噴火ノ猛烈ナル前二十倍シ電光ノ激射モ亦烈ニ鳴動止マズ砂礫ヲ雨ラス最モ多シ十一時ヲ過キテ鳴動漸ク止ミ黑煙稍々散シ天色爽朗列星ノ燦然タルヲ見ル其後時々鳴動スレドモ勢次第ニ衰ヘ人始メテ蘇生ノ思ヲナス翌九日時々鳴動スレドモ漸次衰滅セリ人馬傷害ニ罹ルモノナシト郡中ヲ巡視スルニ燒石灰沙地ニ積ル多キモノハ一尺五寸石ノ大サ一二寸乃至三四寸皆燒燄シ本質ヲ失ヒ輕石ニ化ス十一日天晴山頂ニ登リ實地ヲ檢セントスレドモ鳴動未ダ止マザルヲ以テ果サズ白老郡ハ西其山ヲ距ル僅ニ三里ナレドモ沙石ヲ降サズ其噴裂ノ激射スル偏ニ南ニ在リ故ニ白老以西ハ皆其害ヲ被ラズ

五 明治七年二月八日樽前山噴火シ電光激射灰砂降ルコト雨

ノ如シ震動數回三日ニテ止ム(北海道志)

六 明治七年二月十六日午後二時頃ヨリ樽前山破裂シ七時頃

ヨリ灰ヲ降シ絶夜震動シ曉ニ至リテ止ム市民(札幌)是ニ驚キシニヤアラン十七日ノ夜逃亡者前日ヨリ多シ(札幌)

沿革史)

七 明治十六年十一月五日樽前山噴火シ其燒灰札幌市街ニ吹
キ降ル(札幌沿革史)

八 明治十八年一月四日噴火(日本山嶽誌)

九 明治二十年十月八日噴火砂石迸出スルコト數百丈苦小牧
灰下ル雪ノ如シ(日本山嶽誌)

十 明治二十七年八月十七日午後六時頃ヨリ黒烟ヲ吐キ灰ヲ
降ラシ平常ニ十倍ス(日本山嶽誌)

以上第三及第四ハ同一噴火ニ非ザルヤノ疑アレドモ其年號ニ
差アルヲ以テ暫ク茲ニ別記セリ又第四第五ハ同一噴火ナレバ
記録及口傳トシテ存スルモノハ九回ニ過ギズ。

第五章 爆裂

明治二十七年八月噴火ノ際元北海道廳技手水科七三郎氏之レ
ヲ調査ノ由ナルモ不幸ニシテ其記録現存セザルヲ以テ之レヲ
詳カニスル能ハズ爾來絶エズ少量ノ白煙ヲ吐キ居リシガ本年
一月頃ヨリ徐々活動ヲ初メ四月十二日ニテ前後八回ニ渡リ其
間或ハ降灰シ或ハ鳴動シ或ハ爆裂セリ今樽前岳山麓ニ住スル
神戸良燧合資會社錦多峯第一工場主任治田久氏ノ記憶ニヨレ

ハ左ノ如シト云フ。

一 一月十一日夜頂上ニ火柱ヲ見タリ。
二 同二十二日夜附近部落ニ降灰アリ。

三 二月六日午前九時鳴動噴煙ヲ認ム。

四 二月十日午前三時頃瀛車ノ如キ音響ニ回アリテ東麓及東
南麓ニ降灰アリキ。

五 二月十八日午後一時噴煙アリシモ降灰ナシ。

六 三月三日午前十一時午後三時并ニ午後四時地鳴アリ。

七 三月三十日午前六時頃ヨリ約一時間引續キ大鳴動アリテ
同七時二十分頃爆裂シ噴煙天ニ漲リ豆大ノ砂石ヲ混ジ第
一工場附近ニ約三十分降灰セリト。

八 四月十二日午後十一時四十分俄然強震アリテ同時ニ硝子

戸ニ火光ノ反射ヲ見ル山頂屢々赤ク黒煙熾シニ發出ス。
以上八回中爆裂トシテ注意スベキモノハ最後ノ二回ナリトス
故ニ更ニ之レヲ詳記セン。

●三月三十日ノ爆裂(第二版第一及二圖)

火山ノ南麓ニ伐木セル樵夫等ノ言ヲ聞クニ午前六時三十分頃
ヨリ俄然砲聲ノ如キ音響數回鳴リ渡リ間モナク山頂ニ濃厚ナ